

第7号

● 目次 ●

巻頭言：火山と人間	1
萬華鏡：白頭山を観る－火山研究の材料としての－	2
Area Report [SIGNAL]：「ロシア」・「モンゴル」・「朝鮮地域」	3
日本館便り	4
最近の共同研究会から	5
センター動向	6
研究機関紹介	6
客員教授紹介	7
自己紹介	7
活動風景	8

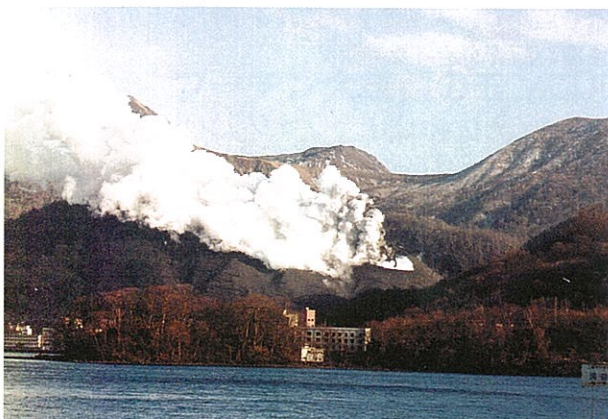
火山と人間

東北大学 東北アジア研究センター教授 谷口 宏充



2000年は有珠山や三宅島など日本の各地で火山活動が活発化し、社会的にも大きな問題を投げかけた。

3月末に噴火が始まった有珠山では、周辺住民約1万6千名の避難が行われた。有珠山の噴火地点は山麓の洞爺湖温泉のすぐ近くである。いつもは洞爺湖の美しい景色と夜の湖上花火を楽しむながら、温泉街をそぞろ歩く人々の姿がひっきりなしに見られた。しかし今年是人通りが絶え、真昼というのに車のライトをつけて走らなければならなかった。フロントガラスには細かい火山灰が音もなく降りつもり、火口の近くでは厚い火山灰に埋没してしまった家や道路などの残骸が各所に見られた。活動が終息に向かっている現在も家に戻ることでできない人々がいる。



有珠山2000年噴火と洞爺湖温泉街

6月末に活動が始まった三宅島では、9月中旬全島民約3千数百名の島外避難が行われ、その後も火口から有毒ガスの流出が続き、2ヵ月が過ぎようとしている現在も島に戻れる見通しは全くたっていない。かつてバードアイランドと呼ばれた緑豊かな島は、泥流によって道路は寸断され、樹木も家々も今は火山灰に覆われた灰色一色の世界である。子供たちは親と離れ、遠く秋川高校の寄宿舎に集団生活をしている。少なくとも今年度一杯はこのままの状態が続くという。

火山噴火は人の営みに対して、このように過酷な状況を作り出す。それ以上の過酷な事態さえかつては発生した。クレタ島のミノア文明を崩壊に導き、アトランティス伝説の源になったギリシャ・サントリーニ火山の約3700年前の噴火や、華麗なローマ帝政時代の市民生活を現代に生き生きと伝えるポンペイ遺跡を残した、イタリア・ヴェスビオ火山の西暦79年噴火がそれである。大規模な火山噴火は周辺地域を破壊に導くと同時に、永く保存するという役割もはたしてきたのである。しかし振り返ってみると、有珠や三宅島の温泉や美しい湖沼も、それどころか島そのものが火山活動によって生みだされたものである。人々が火山からの恵みを受ける以上、それからの脅威に対しても覚悟を決め、備え、人間と火山との共生への路を模索しなければならないのであろう。共生への路とは、過去におきた火山と人間とのかかわりを知り、分析し、火山からの恵みを生かしつつ、将来の危機に向け事前に準備をすることである。そこでは自然科学、人文科学や社会科学的な取り扱いと考えが共に重視され、自然を新たに理解しつつ、人々の生活を豊かにする方策が検討されることになる。



白頭山を観る —火山研究の材料としての—

東北アジア研究センター 教授 成澤 勝

日本の火山の多くが「位階」等を授けられ、また蛇や龍と結び付いた特異な伝承を伴っている。こうした特徴は、朝鮮半島基部の白頭山（長白山）にも共通する。

金代1172年には「興國應王」を、また1193年には「開天宏聖帝」を贈られている。さらに、金の後裔たる清においては民族発祥の地として神聖視され、宮廷では定期的に祭祀を行い、民間でもシャーマニズム信仰の対象となった。境を接し、山を共有する朝鮮諸族の場合も同様である。僧一然がその『三国遺事』に「古記」を引用して言う「太白山」は明らかに白頭山のことであり、まさしく民族の始祖「檀君」降誕の地なのである。しかしその檀君の物語からはこの山が火山であるという印象を受けない。おそらく所謂「大噴火」（10世紀半ばと見られている）のあった以前に形作られた叙事であろう。満族にも始祖ブクリョンシユンの降誕譚として今になお伝わる「三仙女物語」がある。これらは白頭山の叙事としてはむしろ特異である。民間に伝わる多くは、戦いのモチーフ・火のモチーフ、時には水（氷雪）のモチーフに彩られ、実に荒々しい。

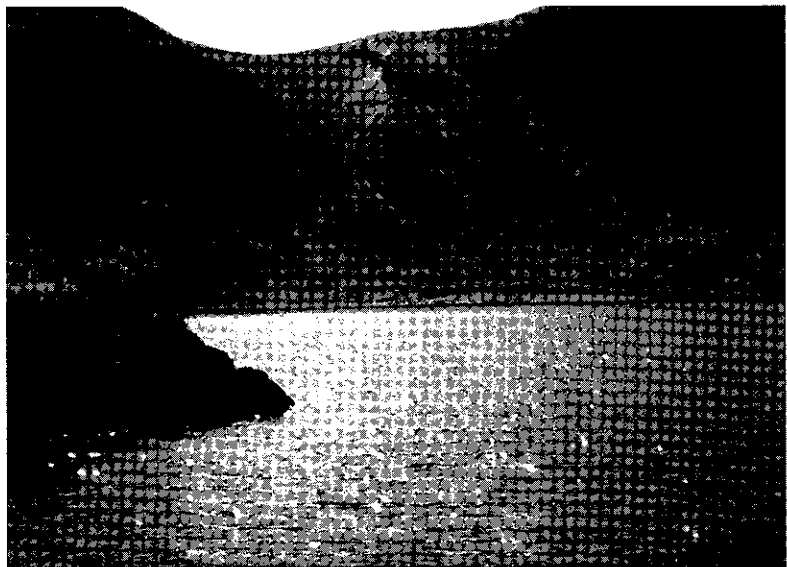
例えば、満族の神話のひとつは

白頭山が噴火した時、火魔神が全てを焼き尽くしていた。そこに、日吉納という娘が天鷲を駆って、天帝を訪ね、火魔神を降伏する方法を聞いた。彼女は天帝のくださった氷塊を持って白頭山にいたり、噴火口に飛び込んで、火魔神の腹の中に潜り込んだ。すると天は崩れ、地は裂け、大音響が満天に轟いた。と思うと、煙は止み、火は鎮まって、ようやく山はもとの姿を取り戻した。そして火魔神の噴火口は大きな湖に変じた。後の人々はこれを天池と呼んだ。

と語る。

ところが同じ「火」と「氷」の戦いでも朝鮮族の伝承では

遠い昔、東海龍王、黒竜江龍王、天池龍王が義兄弟のちぎりを結び、親交を重ねていた。ところが、黒竜江龍王が末弟である天池龍王の愛妾に横恋慕。いかった東海龍王は剣をかざして黒竜江龍王に立ち向かうと、互いに戦いが始まった。そこ



天池を囲む峰々

で長兄の東海龍王が黒竜江龍王を諭すが、収まらない。挟み撃ちにされている黒竜江龍王は口から氷を吐きつけて応戦。東海龍王は熱い息吹でその氷を溶かし、天池龍王は火柱を挙げると黒雲が天を覆い稲妻が走った。云々となる。

こうした伝承は単にフィクションとして処理してしまうことは出来ないであろう。実際にあった現象を当代の人々が、龍とか天帝といった神界や超自然界の概念に仮託しつつも、彼らなりの自然観・認識力によって独自に体系化した、現実の表象と見るべきものと考えられる。火山活動そのものの分析にも重要なデータ（情報）として用に堪えるものであろう。

AREA REPORT

SIGNAL

ロシアから 北方領土問題異聞

ロシア外務省外交学教授のV. シロトキン氏は、9月20日の「独立新聞」において、北方領土と日露平和条約の問題に関する驚くべき持論を展開している。同氏の所説は大要次の如くである。①ロシアの「民主的」勢力の一部代表者は北方領土を返せばすぐに平和条約を結ぶという日本の主張を是認し、「ちっぽけな4島など日本に渡して、日本の友好を得よう」と言う。そこで言及されるのは1824年に太平洋沿岸の「露領アメリカ」を米国に割譲したことや、1867年にアラスカを米国に720万ドルで売ったことである。②ロシアには、国家にとってのいかなる地政学的利益もなしに個人的利益のために領土を売ってしまう傾向があるが、その傾向はソ連時代末期以降さらに強まり、固着してしまった。例えば、ソ連外相シェワルナゼは豊富な石油とガスを持つベーリング海峡の大陸棚を米国に無償で譲った。③そういう傾向がロシア外交に地政学的配当をもたらしたかと問うてみる必要があるし、戦後体制によるヨーロッパの国境の不動性が崩壊した今日の条件では北方領土の日本への引き渡しはロシアのあちこちの国境にとって危険な先例になる恐れがある。④日本の政界にとっては、北方領土問題はむしろ選挙用の内政問題である。1992年に東京で会った自民党のある国会議員は、会議の場では北方領土への日本の主権を証明しておきながら、懇親の席では酒に酔って「島は返さないでくれ。返されたら我々は10～15%の票を失う」と囁いた。⑤ロシアには「黄金の決め球」がある。それは、日本にあるロシアの黄金に対する合理的な所有権である。1916年にツァーリ政府が、1919年には白衛軍のゴルチャック将軍が武器の買い付けのためのデポジットとして日本に黄金を渡したが、それらの書類には「要求があり次第黄金を大阪からウラジオストックに戻すことができる」と明記してある。この公式の黄金の他にも日本は白衛軍の首領たちから黄金を受け取っている。そして、誰一人として小銃一丁、銃弾一個たりとも日本から受け取らなかった。

また、1917年には英国に亡命しようとしていた皇帝ニコライ2世も日本経由で発送した個人所有の黄金5.5トンを強奪された。これらの黄金の価値は、いくつかの外国の評価によれば、その後80年間の利子を入ると現在では800億ドルにもものぼる。⑥日本の主張する南千島領有権の根拠(1956年のソ連の宣言)は極めて曖昧なものであるのに対し、日本にある黄金へのロシアの所有権の根拠は書類により明白である。ロシア外務省はこの決め球の存在を知っているにも関わらず、公式の交渉ではそれを使おうとしない。何故なのか全く不可解である。)

⑤に書かれていることはにわかには信じがたいことだが、その真偽については筆者には論評できない。しかし、本当にロシア外務省が知っていながら平和条約交渉でそれを持ち出さないのであれば、大国ロシアのさすがの見識である。そんなことを言うならば、中立条約を勝手に破って日本に宣戦し、しかも多数の捕虜をシベリアに送って過酷な強制労働をさせたソ連の責任はどうなるのかと日本人なら誰もが思うはずである。外交大学の教授が、インテリ層が読むとされている「独立新聞」でこんな感情的な議論をすること自体が悲しいことだが、しかし、この事態を招いた責任の一端は日本政府にもあるのではないだろうか。「日露平和条約は結ぶ機を逸してしまった」とよく言われる。シロトキン氏が④で言うとおりの、日本では北方領土が国内向け反ソキャンペーンの道具として使われ、「日本固有の領土」という国際的に通用しない理屈ばかりが繰り返されてきた。冷戦時代であればこそ軍縮と非武装地帯の設置などの建設的提案がこの問題の解決に有効であったはずなのに、「北方領土が返還されたら国防施設を作る」などと公言してはばからなかった当時の日本政府の外交的幼稚さと自国民への不誠実さは指弾されて然るべきである。日露両国政府には、大人の態度での真摯な交渉を切に望みたい。

(柳田賢二)

モンゴルから プーチン大統領のモンゴル訪問

社会主義時代にはソ連構成共和国以上にモスクワの影響下に置かれ、チンギス・ハンの積極的評価がタブーだったモンゴルは、1990年代の民主化とソ連圏の崩壊の結果、アジア・太平洋圏や欧米との政治・経済的関係を急速に深め、議会制民主主義国家として生まれ変わった。南の中国との関係も改善され、昨年は江沢民主席の訪問も行われている。しかしソ連時代以来のロシアとの経済的結びつきが断たれたわけではもちろんないし、民主化直後に一時的な反ソ感情の噴出はあったものの、モンゴル国民は、今でも親口的

とさえ言えるだろう。

さて、ロシアのプーチン大統領は、10月26日にモンゴルを訪問する予定であった。これは延期されたが、年内に実現の見通しである。意外なことに、ロシアの国家元首のモンゴル訪問は、ブレジネフ書記長以来実に26年ぶりである。プーチン大統領自身はかつてサンクトペテルブルグ市勤務時代にモンゴルを一度訪問している。この時の彼の仕事は、モンゴルからの債権回収だったと言われる。実はモンゴルとロシアの間には社会主義時代の債務問題がくすぶってお

り、モンゴル側には、プーチンの訪問によってこの問題が再浮上しはしまいかと気をもむ向きもあるようだ。ロシア外務省のロシュコフ次官は、7月の選挙での人民革命党の新政権成立を訪問の理由に挙げているという。『ウドリーン・

ソニン』紙（10月15日）によると、モンゴル側は、プーチン大統領にチングス時代の帽子(?)を、夫人にはモンゴルの民族服を贈呈する予定と言われる。

(岡 洋樹)

朝鮮地域から '後退してはいけない'

韓国最大の建設会社「現代建設」がデフォルトの危機にある。クムガン（金剛）山観光開発、更には民族の聖地ペクトゥ（白頭）山観光開発と、次々に北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）と経済交流を進めるヒョンデ（Hyundai=現代）財閥の中核にあり、これまで力強く韓国経済を牽引してきたゼネコンである。大統領候補にもなった鄭周永会長はしばしば北朝鮮を訪れ、食糧の不足するところに肉牛を贈るなど支援してきており、北朝鮮

としても経済的に頼れる存在であった。

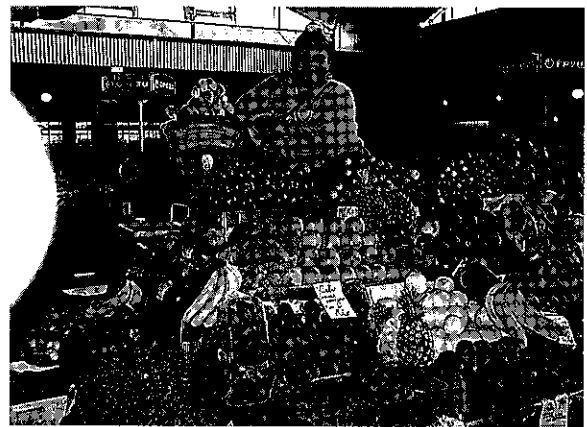
また一方では北朝鮮の対米修好の計画ははかばかしくない。年内の大統領訪朝はなさそうである。南北関係自体も赤十字会談では離散家族相互訪問問題が進展しておらず、期待された金正日総書記の訪南も実施されそうにない。せっかくの「第一歩」が大きく後退するのではないかと懸念される。

(成澤 勝)

日本館 便り nihonkan・dayori

今年になってロシアは大きく変わろうとしています。原油高を背景に石油関連の輸出が急速に伸び、上半期のロシアのGDP成長率は7.5%を記録しました。98年8月に起こった経済危機からロシアはようやく回復しつつあります。ノヴォシビルスクのアカデミー・タウンでも、ロシア経済の好転を実感できます。7月以後、アカデミー・タウンのあらゆる研究所の建物の改装作業が始まり、現在もおこなっています。おそらく今年度末までに研究所内部は見違える程美しくなるでしょう。景気の良さを反映してか、ファースト・フード店やレストランでは食事時に常に満員の状況にあります。また、携帯電話やクレジットカードを持つ人を見かけることが多くなりました。

ノヴォシビルスクを訪れる日本人の数は、ドイツ人や韓国人と比べれば非常に少なく、訪問者はこれまで研究者に限定されていましたが、徐々に訪問者の種類も変わろうとしています。最近ノヴォシビルスク大学はロシア語を学ぶ留学生を確保しようと努力しており、インターネット上に英語のホームページを用意し、ホームページ上で留学の手続きができるようにしています。このような努力の甲斐あって、現在ノヴォシビルスク大学で学ぶ日本人留学生は4人います。また、ノヴォシビルスク市は札幌市と姉妹都市関係にありますが、その関係を通じて、ノヴォ



ノヴォシビルスクの中央市場

シビルスク教育大学に日本人留学生が2人学んでいます。今後ますますノヴォシビルスクで学ぶ日本人留学生が増えるように思います。

ノヴォシビルスクはシベリアの頭脳が集約されている都市であり、潜在的に利用可能な知的資源にあふれていますが、まだ日本では十分に知られているわけではありません。しかし、この知的資源に注目してノヴォシビルスクを訪問するビジネスマンが増えつつあります。既に新日鉄は触媒研究所に委託研究を依頼しようと動き出していますし、ノヴォシビルスクのコンピューター・プログラマーに仕事を依頼しようとする日本の企業も現れています。10月に東北アジア懇話会が企画したノヴォシビルスク調査団も、日本企業にアカデミー・タウンのポテンシャルを知らしめるのに貢献したように思います。ノヴォシビルスクと日本との様々な分野の交流がこれから本格的に始まる予感がいたします。

(塩谷昌史)

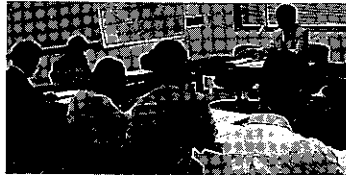
● 最近の共同研究会から ●

◆第8回「古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証」

Dr. Yonho SUH ソ・ヨノ (徐淵昊)

東北アジア研究センター客員教授 / 高麗大学校文科大学教授
韓国民俗学会副会長
「韓国における伝統祭祀儀礼の類型」

平成12年7月14日 (火)



着実に進められる共同研究の学習会

◆第9回「古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証」

刘田啓史郎

東北アジア研究センター兼任教授 / 歯学研究科教授

「生理学から見た東北アジアの民族」平成12年7月25日(火)

◆大学間国際交流フォーラム

「東北アジアの学術交流の現状と将来」

本年8月、「21世紀の研究と教育に関する国際シンポジウム」—大学間学術・学生交流の役割 (ISRE2000)—が仙台国際センターをメイン会場に開催された。本シンポジウムは東北大学が学術協定を締結している大学を中心に、大学間の連携について討議を行うことを目的として企画された。シンポジウムの中核である大学間国際交流フォーラムでは全体会議と10の専門分科会が開催され、本センターでは8月20日に「東北アジアの学術交流の現状と将来」を主催した。本分科会にはセンター教官に加え、モシキン・ロシア科学アカデミーシベリア支部副総裁、オチル・モンゴル科学アカデミー歴史学研究所長、パダルチ・モンゴル技術大学学長、李・ソウル大学校総長、裴・吉林大学副学長、ディカンスキー・ノボシビルスク国立大学学長が参加した。各参加者からは各国における大学や研究機関の置かれている現状と問題点について報告があり、今後の国際協力を進めながらいかに研究・教育を発展させるかについて議論された。

特にアジアを対象とする地域研究のありかたについて話題が絞られ、関係した諸国が連携した研究体制をとること、本センターが中核となり専門の研究者を養成する組織作りを進めること、またこうした会議を今後定期的に開催することなどについて合意をみた。本分科会の討議内容は徳田センター長によって全体会議に報告され、国際シンポジウム共同宣言の内容にも盛り込まれた。専門分科会の論文集は

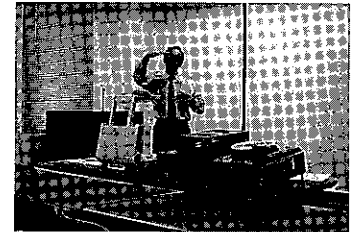
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/cneas/homepage/whatsnew/sympo000820-e.pdf>に全文が掲載されている。また70を越える各専門分野での個別シンポジウムが前後

して開催され、本センター関連では「21世紀におけるモンゴル研究の課題」、「地球環境変動に関わる国際ワークショップ (ノアから見たシベリア)」の2つについて、活発な発表と討議が行われた。

◆国際シンポジウム

「ノアから見たシベリア」

本年8月に開催された東北大学主催の「21世紀の研究と教育に関する国際シンポジウム」の一つとして、本センターは一つのリフォーラム・セッションと2つのワークショップを開催しました。そ



基調講演するR.マホニー研究員

の一つがこの「ノアから見たシベリア」です。これは「地球環境に関する国際ワークショップ」中の一つのワークショップでもあり、仙台国際センターで8月22日に開催されました。時間は9:50~17:30。場所は国際センター小会議室8で、参加者は国内外の約50名でした。ロシア科学アカデミー・シベリア支部副総裁V.モロディン教授、アメリカ・アラスカ大学国際北極圏研究所所長赤祖父俊一教授などによるノアデータ研究の意義についての講演のあと、アメリカ・NOAA国立地球物理学データセンターのC.エルビジ研究員、同NASAゴダード宇宙航空研究所R.マホニー研究員による基調講演、さらに国内外の10名によって最新の研究報告が行われ、ノアデータ研究上画期的意義を有する研究会となりました。また、その中で今後のシベリア・ノアデータ利活用の展望が示されたことも特筆すべき事柄です。

◆公開シンポジウム

2000年10月14日(土)午後1時より東北大学川北キャンパス国際文化事務棟3階大会議室において公開シンポジウム「変動するアジアと地域研究の課題」が開催された。このシンポジウムは日本貿易振興会アジア経済研究所の協力を得て、より広い見地から「地域研究のあり方」について議論を喚起することにした。

同シンポジウムは日本貿易振興会アジア経済研究所と東北大学東北アジア研究センターの共催によるもので、明日香壽川・本センター助教授をはじめとする4人の講演者による次の講演が行われました。



公開シンポジウム風景

明日香壽川氏 (東北大学東北アジア研究センター助教授)
「アジアの工業化と環境問題」
成澤 勝氏 (東北大学東北アジア研究センター教授)
「10世紀の中国白頭山噴火と文理融合型研究の試み」

大西 康雄氏 (アジア経済研究所主任研究員)
「中国の物流と地域経済圏」
山口 博一氏 (文教大学国際学部教授)
「地域研究と国際協力のあり方」

センター動向

本年10月～12月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

【国内から】

- 渡邊幸治 (ワタナベ、コウジ) 教授：経済団体連合会特別顧問・元在ロシア連邦日本国特命全権大使、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹 (エナツ、ヨシキ) 教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 横山隆三 (ヨコヤマ、リュウゾウ) 教授：岩手大学工学部教授、森林等の資源

【海外から】

- 徐淵昊 (ソ、ヨノ) 教授：韓国、高麗大学校文科大教授、東アジアの儀礼・芸能における身体と社会の表象に関する共同研究
- EROKHINE, Guennadi N. (イエローヒン, G. N.)

教授：ロシア、ロシア科学アカデミー・計算数学及び計算物理学研究所地球物理学情報技術研究部門教授・部長、衛星リモートセンシングを用いたシベリアの環境評価方法の開発

- 确精扎布 (チョイジンジャブ) 教授：中国、内蒙古大学蒙古語文研究所教授、モンゴル語資料の計算機処理
- 陳春林 (チン、シュンリン) 研究員：中国、廃棄物溶融炉の炉内解析に関する計算機シミュレーション
- BARINOVA, Anna A. (バリノワ, A. A.) 研究員：ロシア、ロシア科学アカデミー・シベリア支部細胞・遺伝学研究所研究員、東北アジア地域における淡水動物の遺伝的多様性に関する研究
- TARAN, Georgui S. (タラン, G. S.) 研究員：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部中央植物園上級研究員、ノア・データを利用したオビ・イルティシ川氾濫原植物群落の分布構造の解析とデータベースの構築 (柳田賢二)

研究機関紹介

●内蒙古大学蒙古語文研究所

内蒙古大学は中国の内蒙古自治区の中心地、呼和浩特(フフホト)にある総合大学で、特にモンゴル学と畜産学の研究で世界に名を馳せています。

蒙古語文研究所は、1963年に内蒙古大学の蒙古語文研究室として設立され、1973年に研究所になりました。当研究所は中国でも早い時期に設立されたモンゴル語の専門研究機関です。当研究所には現代モンゴル語研究室(モンゴル語方言を含む)、アルタイ諸語研究室(満洲・ツングース語族、チュルク語族を含む)、モンゴル語史研究室(古代文字を含む)、実験音声学研究室とモンゴル語情報処理研究室、および資料室があります。

研究所の25人のスタッフのうち教授、助教授は18人です。この研究スタッフはモンゴル語のすべての面で研究を行っていますが、特に現代モンゴル語とその方言、モンゴル系諸言語、契丹小文字、モンゴル語情報処理等の研究で世界の学界の注目を集め、高い評

価を得ています。

当研究所から出版されている『モンゴル語族言語・方言研究叢書』、『モンゴル語・満洲語研究』、『現代モンゴル語文法』、『モンゴル語文法研究』、『蒙漢辞典』、『契丹小文字研究』、『モンゴル語音声研究』、『モンゴル語情報処理』、『モンゴル語文字コード』等の研究書をはじめ、研究所で作成した《現代モンゴル語データベース》、《モンゴル語電子出版システム》等は当研究所の研究レベルを代表するものです。このほか、年に一冊の論文集を刊行しています。

当研究所は研究機関であると同時に、モンゴル語学部の授業を担当し、大学院の修士課程と博士課程の学生を受け入れて指導を行っています。

当研究所は内外の学術交流を重視して、積極的に交流を進めています。現在、モンゴル、カルムイク、ブリヤート、ロシア、日本、韓国、アメリカ、カナダ、イギリス等の国々の多くの研究機関と色々なレベルで交流を行っています。

(内蒙古大学蒙古語文研究所教授・确精扎布「チョイジンジャブ」)

● 東北アジア研究センター客員教授紹介 ●

内蒙古大学蒙古語文研究所教授 确精扎布 (チョイジンジャブ)

私の専門はモンゴル言語学です。1950年代から主としてモンゴル語の文法（特に形態論）、方言、トド文字等の研究を行い、『現代モンゴル語・形態論』、『モンゴル文字・トド文字対照辞典』、『オイラート方言語彙集』、『モンゴル語文法研究』等9冊の著書を刊行しました。1957年より内蒙古大学の学部と大学院でモンゴル語に関する授業を行い、修士・博士あわせて十数人の研究者を育成しました。

1980年代の中頃から言語研究にコンピュータを使う必要性を痛感し、この方面の研究を始めました。この15～16年間に、コンピュータでモンゴル文字を処理できるようにした事をはじめ、多くの基礎的な研究を行ってきま

した。現在、私たちの蒙古語文研究所【研究機関紹介を参照】のコンピュータはモンゴル語研究に関係するすべての文字を扱うことができるようになってきました。さらに、のべ語数500万語以上の《現代モンゴル語データベース》を構築し、様々な方面で利用しています。北京大学の「方正」技術研究院と共同で開発したソフトウェア《モンゴル語電子出版システム》はこの分野では中国内で一番多く使われています。

1993年以来、モンゴル語の文字コードの国際標準をつくる作業に従事し、昨年ISOの承認を得ました。これに関連して、今年『モンゴル語の文字コード』という本を上梓しました。

自己紹介

東北大学・東北アジア研究センター助教授 高倉 浩樹

10月1日より東京都立大学から本センターに赴任しました高倉浩樹と申します。仙台は私にとって全く見知らぬ新しい街ではありません。というのも小学校時代を過ごした場所でありまして、20年ぶりに帰仙したことになります。緑に溢れた美しい街並みと新しくきれいな研究室で仕事ができることをうれしく思っております。

私の専門は社会人類学およびシベリア民族誌学です。社会人類学という言葉は聞き慣れないかもしれませんが、文化人類学あるいは民族学とほぼ同じ中身と考えてもらってかまいません。東北アジア研究センターのなかでは、瀬川昌久さんと同じ方法論です。つまりフィールドワークに基づく個別実証的な方法と通文化的比較方法とを組み合わせることによって、現代社会における民族・地域文化の研究を行おうとするものです。あらゆる民族・地域を一人の人類学者が実際に調査研究することは時間的にも体力・知力的にも難しいので、ふつう人類学者は専門とする民族・地域をもちますが、私の場合はそれがシベリアということになります。

シベリアといっても、西はウラル山脈から東は北太平洋沿岸と広大な領域になってしまっていて、実際に私がフィールドワークをおこなっているのは、ロシア連邦の中にあるサハ共和国というところなんです。日本列島からほぼ真北に位置し、レナ川を中心にひろがる広大な共和国で、ダイヤモンドや金がとれることでも知られています。この地域はシベリアの中でも寒いことで知られています。12月と1月の平均気温がマイナス50度になり、時々マイナス60度まで達します（なおサハ共和国で、かつ地球上でもっとも寒い

温度を記録したオイミヤコンという町は-71度)。その一方、夏には+30度まであがるという年間気温較差が100度近くになるとこ

ろです。ロシアのテレビで天気予報をみたことのある方は、ヤクーツク（サハ共和国の首都）だけが、他の地域と比べて突出して低い気温であることにお気づきかもしれません。

私はこの共和国の先住民であるサハ人とエヴェン人の生業活動を中心に調査研究してきました。言語的にチュルク系民族のサハ人は牛馬飼育を、ツングース系民族のエヴェン人はトナカイ飼育を伝統的に営んできました。社会主義時代にこれらの生業はいわば社会主義経済の中の畜産業として位置づけられ、ポストソ連時代には国営農場などが解体し、民営化あるいは家族経営という形に再編されています。とくに中心に調べてきたのはトナカイ飼育でして、家畜放牧のルートから家畜群の行動管理方法、家畜認識や所有観といったあり方が、社会主義時代の制度とどのように絡み合っているかということです。1年半ちかく牧民と一緒に移動生活をしましたので、今ではトナカイ騎乗・トナカイ橇の運転にはじまりトナカイの畜殺・解体といったこともできるようになりました。最近、サハ人の牛馬飼育についても調査をしています。

東北アジア研究センターでは地域環境研究部門のなかの社会生態学研究分野に属しており、4階に研究室があります。今後ともよろしくお願いたします。



シベリア・ヤナ川上流に位置するトナカイ牧夫の宿営地付近にて



片平まつり

東北大学附置研究所等の一般公開「片平まつり2000」が平成12年10月27日(金)・28日(土)の両日東北大学片平キャンパス及び東北大学星陵キャンパスで開催され、多くの市民が見学を訪れた。

また記念講演会が平成12年10月28日(土)16:00~18:30金属材料研究所講堂で開かれ、

加藤医学研究所 土屋 滋教授

「骨髄バンクとさい帯血バンク：待ち望む人・応える人・それを支える人々」

東北アジア研究センター長 徳田昌則教授

「地球環境とリサイクル」

の公開講演があった。

東北アジア研究センターの一般公開は「東北アジアの自然と文化」と題し、次の6つの展示を行った。

1) シベリアのトナカイ飼育

極寒の地・東部シベリアのヤクーチアに暮らすトナカイ



飼育民・サハ、エヴェンの人々の生活を、パネル写真と解説文でわかりやすく紹介した。

2) 地中レーダによる地下探査デモンストレーション

地中レーダは地下水や地質、遺跡など地下の様子を

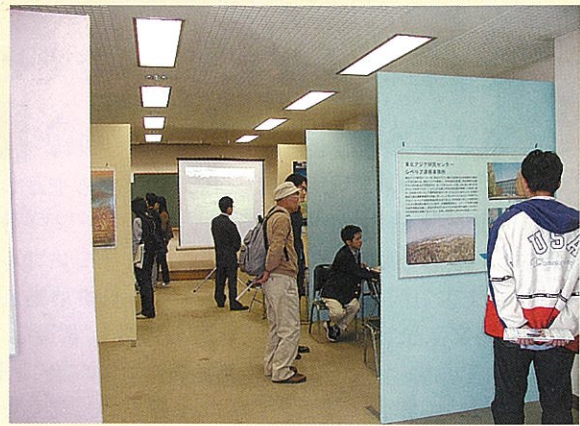
電波を使つて目に見えるようにする探査装置である。シベリアやモンゴルで実施している地中レーダ探査をデモンストレーションした。

3) 現実の都市をコンピューターで再現

より住みよい町づくりを実現するために、仙台や札幌等の都市圏における都市開発、交通、環境等をコンピューターの中の図面情報で分析した結果を展示した。

4) 中国東北部白頭山の10世紀巨大噴火と王朝変遷

10世紀、中国と北朝鮮との国境に位置する白頭山では、



過去2000年間では世界最大級の火山爆発が発生した。この噴火の経緯と周辺諸国の歴史に与えた影響をわかりやすく解説した。

5) 大ミニ故宮展

中国の明清王朝の都であった北京の紫禁城(故宮)に関連する書物・書画・服飾品などの実物、あるいは、宋明清の皇帝肖像(複製パネル)などを展示し、中国の王朝文化を北京の歴史に重ねて紹介した。

6) 南北交流の中の平泉文化

明州(浙江省)・博多・京都・平泉、さらには夷が島(北海道)・サハリン(樺太)・沿海州へと連なる南北交流の中で、燦然たる輝きを誇った平泉文化の一面を明らかにした結果をデモンストレーションした。

当センターの一般公開には小・中学生・高校生・大学生・一般市民300人が見学を訪れ、盛況であった。



編集後記

10月は科学研究費の申請、片平まつりの準備とセンターの教官一同多忙な日々を過ごしニュースレターの編集も遅れ気味でしたが、皆さまのお陰でやっと発行できることになりました。多忙な中、原稿を書いて頂いた先生方に感謝いたします。(北風 嵐)